

中山遺跡

中山遺跡は、東かがわ市土居に位置し、国道11号大内白鳥バイパス建設に伴い令和元年8月1日から10月31日の期間で発掘調査を実施した。

今回の調査地はバイパスと県道の接続部で川の付け替え工事が急ぐことから、橋脚を施工する部分を中心とした1,099㎡を対象としている。

遺跡の周辺には南海道の可能性がある道路側溝が見つかった坪井遺跡や、中世の集落跡である三殿北遺跡、江戸時代の砂糖生産に使った竈が見つかった三殿出口遺跡などが知られている。



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

遺跡は東かがわ市とさぬき市にまたがる山塊に北川が開析した谷の出口付近に位置し、現在は水田として土地が利用されている。対象地を含めた周辺は北川に向かって2段の河岸段丘が形成されており、川に隣接することや試掘の結果から居住域ではなく生産域にあたることを予想された。

調査の結果、1区(調査区南半)では耕作土、中世以降の包含層の下部にベース層となる粗砂～シルト層が広がり、その上面で北川の流下する方向と一致した溝、鋤溝、取水を目的としたと思われる素掘りの土坑を確認した。遺構からの出土遺物は少ないが、土坑からは土師質土器に混じって宋銭の破片が出土しており、おおむね中世の遺構群であると判断できる。



写真1 1区完掘状況(東から)



写真2 2区2面完掘状況(東から)

2区(調査区北半)のうち1区に近い部分は同様の堆積状況が連続して遺構はほとんど見られないのに対し、2区北半の一段高い部分では遺構面が2面認められた。上位では溝が2条だけであるのに対し、下位では鋤溝を中心とした遺構がやや集中する傾向がみられた。溝の方向から概ね2グループに分類されるが、時期差を反映するものかどうかを決定づけるような土器類は出土しなかつたため、その判断は今後の調査に委ねたい。

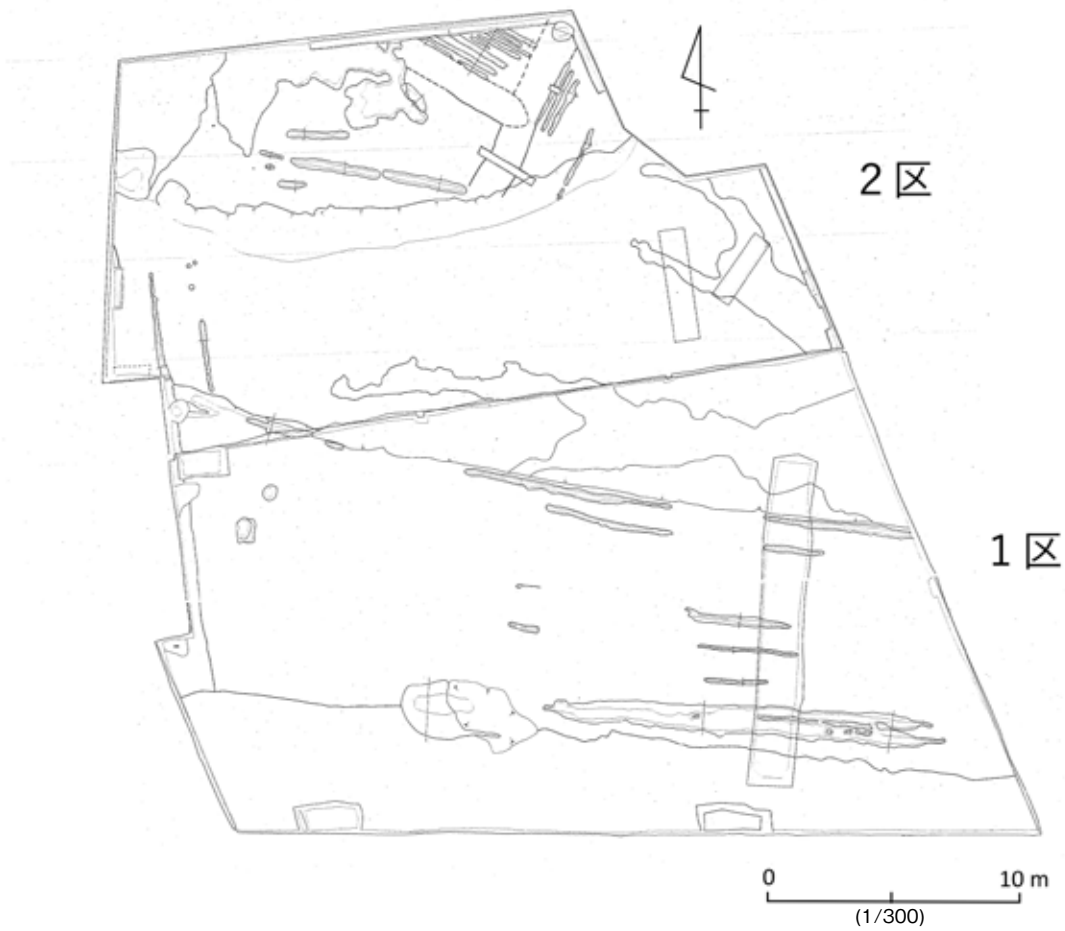
1・2区それぞれで下層確認のトレンチ調査を行ったが、いずれも粗砂～細砂の分厚い堆積がみられ、北川が氾濫を繰り返しながら河床を下げていったことが判明した。わずかに1点ではあるが、砂から弥生時代に属するとみられるサヌカイト製の打製石包丁が出土していることから、北川の上流域には当該期の遺跡の存在がうかがわれる。中世の遺構のベース層は砂で保水力がないことから、検出した鋤溝は畑

の畝間の小溝の可能性が高い。近世以降は粘質土を入れて水田に転じたことが推定される。(宮崎)



写真4 2区遺構面下の堆積状況(北東から)

写真3 2区2面の鋤溝群(北西から)



第3図 遺構配置図

おき 沖遺跡

沖遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。国道438号道路改良工事に伴い令和元年4月1日～9月30日の期間で発掘調査を実施した。対象面積は1.112㎡である。本遺跡は丸亀平野東部、大東川の南岸に位置し、周辺には北から西に30°傾く方向をもとにした区画の条里地割が広がる。約300m北には、古墳時代後期の竪穴建物跡や古代の掘立柱建物跡や水田跡を検出した名遺跡がある。

沖遺跡は平成30年度に道路東端の側溝部分（幅2m）の調査を実施し、令和元年度は平成30年度調査区の西側を調査した。沖遺跡の中央部分には南北に延びる市道があるが、市道東側の調査区は北から2-3区・2-1区・2-2区・2-4区、市道西側の調査区は北から3-4区・3-5区・3-3区・3-1区・3-2区と呼称した。

いずれの調査区も耕作土の下には褐灰色砂質シルト層が堆積し、その下には黒褐色粘土層、黄色粘土層が堆積しており、褐灰色砂質シルト層の上面（1面）、黒褐色粘土層上面（2面）、黄色粘土層上面（3面）で遺構を検出した。北方にある名遺跡では黒褐色粘土層上面で水田跡を検出したことから、沖遺跡ではこの土層に類似する黒褐色粘土層上面（2面）で遺構検出を行ったが、水田跡は検出されなかった。1面では古墳時代から中世の掘立柱建物跡や溝状遺構、古代以前の河川跡を検出した。2面では遺構は検出できなかった。3面では弥生時代後期のものと考えられる溝状遺構を検出した。なお、北部の3-3区では褐灰色砂質シルト層の堆積はみられず、黒褐色粘土層上面と黄色粘土層上面の2面の調査を行った。また、市道の東側で最北部の2-3区では耕作土直下には黄色粘土層がみられ、褐灰色砂質シルト層や黒褐色粘土層の堆積はみられず、黄色粘土層上面で遺構検出を行った。市道の西側で、最北部の3-4区では東部に厚さ5cmほどの黒色粘土層、その下には黄色粘土層が堆積しており、2面の調査を行ったが、中央から西部及び、3-4区の西側の3-5区では黒色粘土層の堆積はみられず、黄色粘土層上面の1面の調査を行った。



第4図 遺跡位置図（1/25,000）

弥生時代以前

弥生時代以前の遺構は少ない。3-2区で検出された溝状遺構SD3022、3-3区の2面で検出された溝状遺構SD3054がある。SD3022は蛇行しながら東西に走る。平成30年度調査した1-3区で検出した溝状遺構SD1017と埋土が類似することから、連続すると考えられ、弥生時代後期のものと考えられる。SD3054は2-3区の溝状遺構SD2004に連続する。遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代以前のものと考えられる。

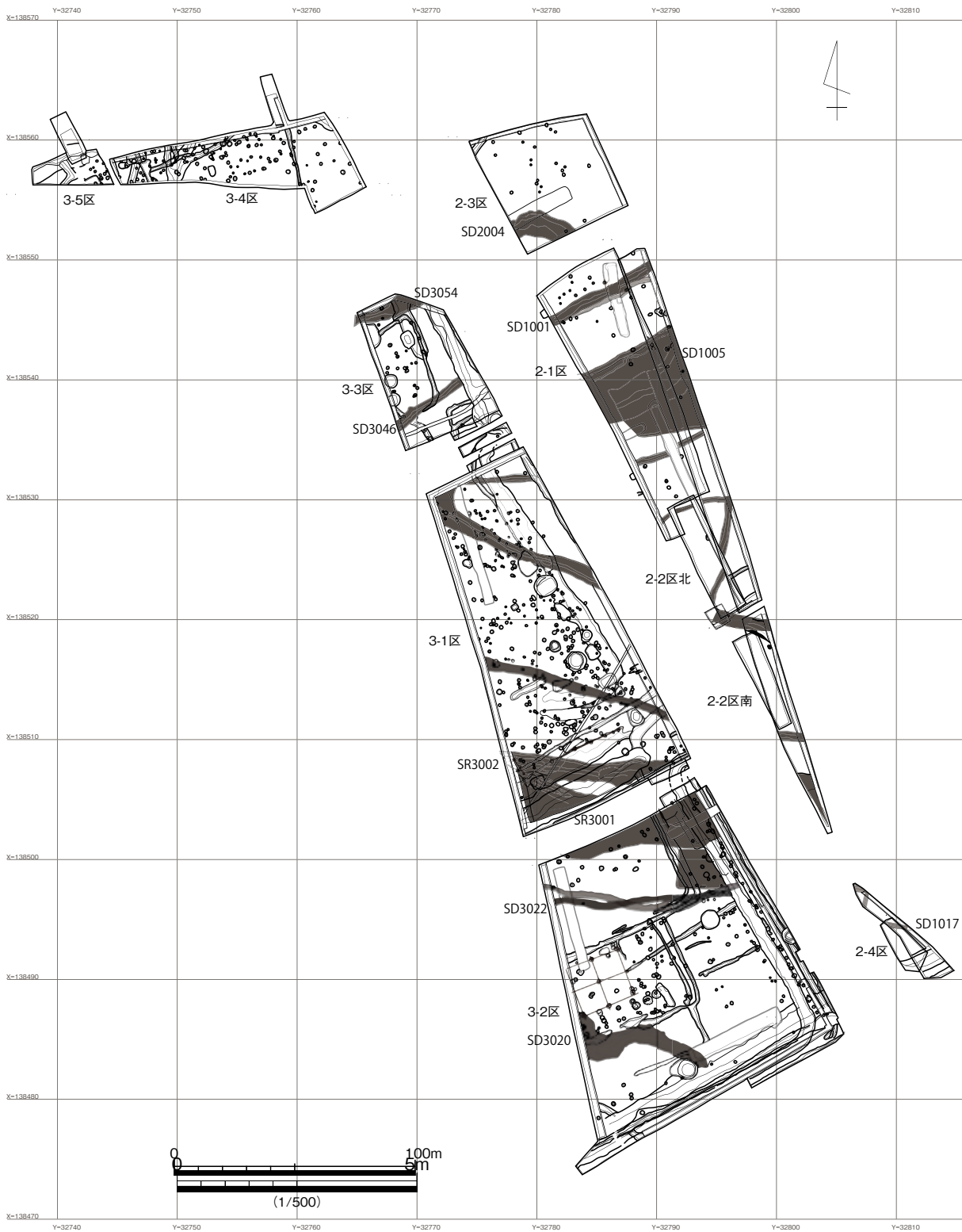
古墳時代

溝状遺構12条、竪穴状遺構1基、河川跡2条が検出された。3-3区の溝状遺構SD3046は市道東側の2-1区で検出されたSD1001に連続する可能性が高い。2-1区SD1005は古墳時代中期から後期の溝状遺

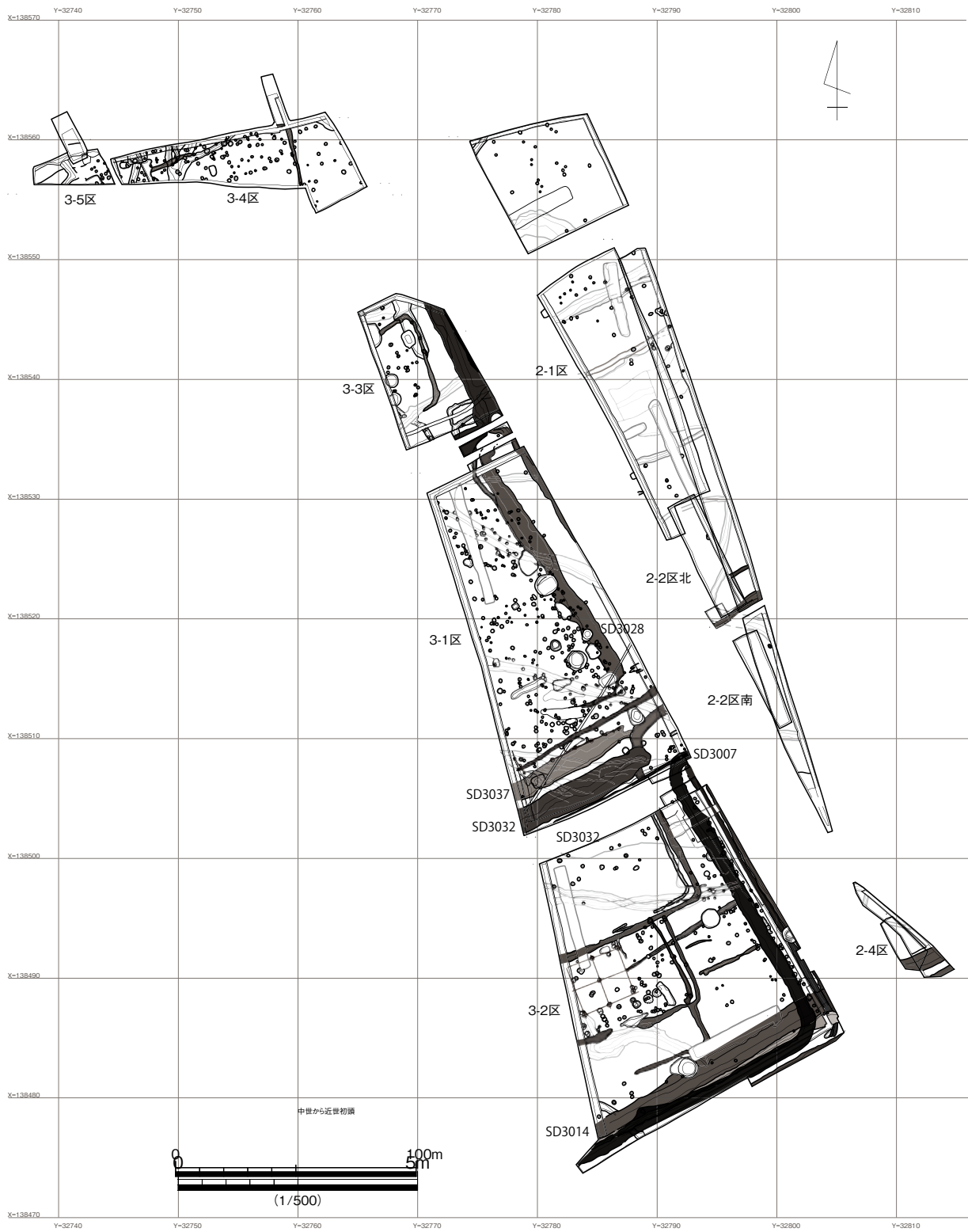
構で、幅 8m、深さ 0.9 m である。土師器数点が出土した。そのほか、北西から南東に向かって、数条の溝状遺構が検出された。いずれの遺構も遺物の出土量は少ない。3-2 区南部で検出された SD3020 は幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 0.4 ～ 0.5 m で、北西から南東に蛇行しながら向かい、中世の溝状遺構 SD3014 に削平される。埋土は細砂で、土師器甕など少量の土器片が出土した。この遺構は自然流路の可能性が高い。また、3-1 区から 3-2 区では北西から南東方向の 2 条の河川跡（SR3001・SR3002）が検出された。南側の SR3001 のほうが新しい。土器片・須恵器片が少量出土した。

鎌倉時代から江戸時代前半

周辺にみられる条里地割に平行する溝状遺構が 30 条程度検出された。最も南に位置する 3-2 区の南端と東端では数条の溝状遺構が重複して検出された。なお、3-2 区の南側は東西に走る市道があり、この市道は周辺の条里地割に合致する。3-2 区の南部を西から東に向かう SD3007 は調査区南東隅で北に直角に曲がり、3-2 区の北側の 3-1 区の南東隅で東に向かう。また、3-1 区で検出された南から北に向かう溝状遺構 SD3028 は 3-1 区と 3-3 区の境界付近で東のほうに向かう。南から北に向かう溝状遺構は連続せず、東に方向を変えるが、市道東側の 2-1 区・2-2 区では連続すると考えられる溝状遺構は検出されなかった。また、3-1 区南部には東西方向の溝状遺構 SD3032・SD3037 がある。SD3032・SD3037 は南北方向の SD3007 と L 字状に配置され、その内側には掘立柱建物を構成すると考えられる多数の柱穴跡が検出された。これらの溝状遺構からは鎌倉時代から江戸時代初期の陶磁器・土師質土器、柱穴跡は土師質土器が少量出土した。これらの出土遺物から沖遺跡では周辺にみられる条里地割に平行する溝状遺構は鎌倉時代に掘削されたものと考えられる。（森下友）



第 5 図 古墳時代以前



第6図 鎌倉時代から江戸時代初期



写真5 2-1区 (北から)



写真6 2-3区 (南東から)



写真7 3-1区 (北から)



写真8 3-1区 (南から)



写真9 3-3区 (北から)



写真10 3-4区 (南東から)



写真11 3-2区 (南西から)

おきみなみ
沖南遺跡

沖南遺跡は丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。国道438号道路整備工事に伴い、令和元年7月に発掘調査を実施した。調査は、道路の擁壁部分幅2mについて先行して行ったもので、調査対象面積は96㎡である。

遺跡の約200m北側には大東川が流れ、南側には台地が迫る。周辺は水田地帯で条里地割がよく残る地域である。北東約500mには奈良時代に創建された法勲寺がある。北約500mにある名遺跡では古墳時代後期の竪穴建物や古代の水田跡、中世の溝群が、北150mにある沖南遺跡では条里地割に平行する中世の溝群が見つかった。



第7図 遺跡位置図 (1/25,000)

調査は北側から1-1～1-3区として実施した。試掘調査の結果から、遺構面2面を想定して実施した。1-1・2区では、耕作土下約80cm～1mで第1遺構面である灰黄褐色粘土層を、その下部20～50cmで第2遺構面である明黄褐色粘土層（基盤層）を検出した。1-1・2区は湿地状を呈し、調査中も湧水が絶えなかった。第1遺構面を形成する灰黄褐色粘土層は南側の1-3区へ近づくに従い薄くなり、1-3区では微高地となり、第1遺構面は消滅する。

1-1・2区では第1遺構面で東西方向の溝をそれぞれ1条検出した。いずれも周辺の条里地割とは方向が異なる。1-2区で検出した溝は幅135cm、深さ70cmを測る。時期のわかる出土遺物はなく、条里地割施工以前であること以外に時期は不明であるが、規模から基幹的な水路の役割を果たしたと考えられる。

1-3区では、低湿地から微高地へ変化する境界付近で、条里地割と同方向の東西方向の溝を3条検出した。このうちの1条からは土師質土器椀、瓦器椀、瓦などが出土し、出土遺物から13世紀頃と考えられる。3区で検出した溝の南側では微高地が広がることが予想され、次年度以降の調査成果が期待される。(山元)



写真12 1-1区第1遺構面（北から）



写真13 1-2区溝断面（東から）



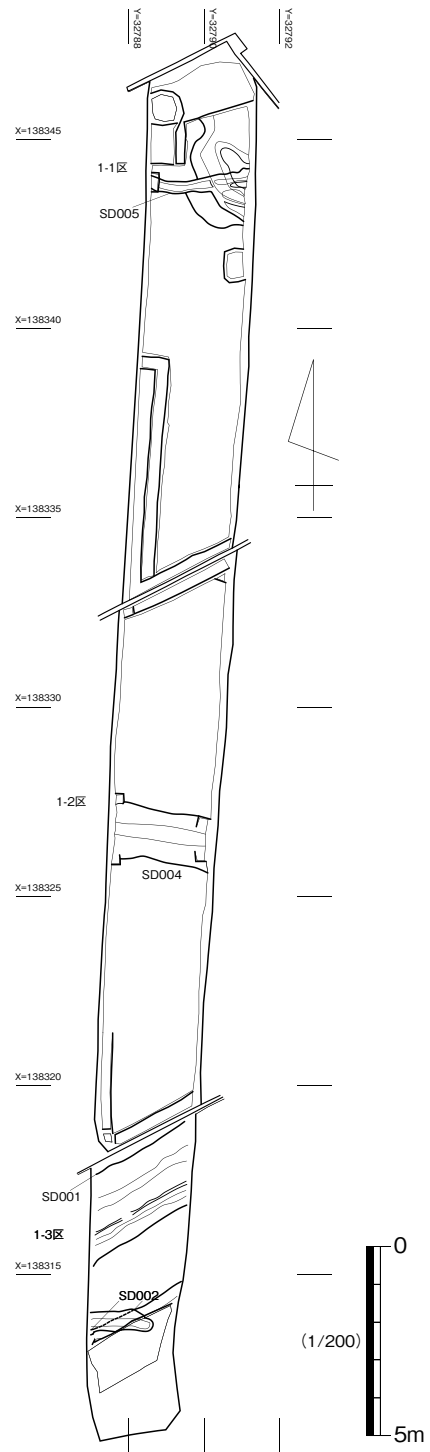
写真 14 1-2区 (北から)



写真 15 1-3区 (東から)



写真 16 1-3区 (南から)



第 8 図 遺構配置図